

七寶の柱

泉鏡花作

全一章

山吹つゝじが盛だのに、其の日の寒さは、俣の上
で幾度も外套の袖をひし／＼と引合せた。

夏草やつはものどもが、と云ふ芭蕉の碑が古塚の
上に立つて、其のうしろに藤原氏三代榮華の時、龍
頭の船を泛べ、管絃の袖を翻し、みめよき女たちが
紅の袴で渡つた、朱欄干、瑪瑙の橋のなごりだと言
ふ、蒼々と淀んだ水の中に、馬の首ばかり浮いたやう
な、青黒く朽古びた杭が唯一つ、太く頭を出して、
其のまはりに何の魚の影もなしに、幽な波が寂しく
巻く。

―― 雲に薄暗い大池がある。

池がある、此の毛越寺へ詣でた時も、本堂わきの
事務所と言つた處に、小机を圍んで、僧とは見えな
い、鼠だの、茶だの、無地の袴はいた、閑らしいの
が三人控へたのを見ると、其の中に火鉢はないか、

赫と火の氣の立つ

と然う思つて差覗いた

ほどであつた。

旅のあはれを、お察しあれ。

五五月の

中旬と言ふのに、いや、何うも寒かつた。

あとで聞くと、東京でも袷一枚ではふるへるほどだつたと言ふ。

汽車中、伊達の大木戸あたりは、眞夜中のどしや降で、此の様子では、思立つた光堂の見物が如何う成るだらうと、心細いまできづかはれた。

濃い霧が、重り／＼、汽車と諸ともに駆りながら、其の百鬼夜行の、ふは／＼と明けゆく空に、消際らしい顔で、硝子窓を覗いて、

「もう！」

と笑つて、一つ一つ、山、森、岩の形を顯はす頃から、音もせず、霧雨に成つて、遠近に、まばらな田舎家の軒と々もに煙りつゝ、仙臺に着いた時分に雨はあがつた。

次第しだいに、麥むぎも、田たも色いろには出でたが、菜種なたねの花はなも雨あめにたゞかれ、畠はたけに、畝あぜに、ひよる／＼と亂みだれて、女をみ郎花なへしの露つゆを思おもはせるばかり。初夏しよかはおるか、春はるの闌たけなはな景色けしきとさへ思おもはれない。

あゝ、雲くもが切きれた、明あかるいと思おもふ處ところは、

「沼ぬまだ、あゝ、大おほきな沼ぬまだ。」

と見みる。雨水あまみづが渺々べうべうとして田たを浸ひたすの

で、行ゆく／＼山やまの陰かげは陰慘いんさんとして暗くらい。

處々ところ／＼巖蒼あきく、ぼつと薄紅うすあかく草くさが染そまる。嬉うれしや日ひが當あたると思おもへば、角かどぐむ蘆あしに交まじり、生茂おひしげる根笹ねささを分わけて、さびしく石楠花しやくなげが咲さくのであつた。

奥おくの道みちは、いよ／＼深ふかきにつけて、空そらは彌いぢが上うへに曇くもつた。けれども、志しす平泉ひらひらに着ついた時ときは、幸さいひに雨あめはなかつた。そのかはり、俾くろまに寒さむい風かぜが添そつたのである。

――さて、毛越寺まうえつじでは、運慶うんけいの作さくと稱とふる仁王にわう尊んをはじめ、數かずある國寶こくほうを巡覽じゆんらんせしめる。

「御参詣の方にな、お觸らせ申しはいたさんのぢやが、御信心かに見受けまするで、差支へませぬ。」

手に取つて御覧なさい、さ、さ。」
と腰袴で、細いしなび竹の鞭を手にした案内者の老人が、硝子蓋を開けて、半ば繰開いてある、玉軸金泥の經を一巻、手渡し、て見せてくれた。

其の紺地に、清く、さら／＼と装束上つた、一行金字、一行銀書の經である。

俗に銀線に觸るゝなどと言ふのは、恚うした心持かも知れない。尊い文字は、掌に一字づゝ幽に響いた。私は一拝した。

「清衡朝臣の奉供、一切經のうちであります。一時價で申しますとな、唯此の一巻でも一萬圓以上であります。」

橘南谿の東遊記に、
是は清衡存生の時、自在坊蓮光といへる僧に命じ、一切經書寫の事を司らしむ。三千日が間、能書の僧数百人を招請し、供養し、是を書寫せしめしとなり。

余も此經を拜見せしに、其の書體楷法正しく、行法亦精妙にして――
と言ふもの即是である。

一寸（此の寺のではない）或案内者に申すベ
き事がある。君が提げて持った鞭だ。が、遠くの掛
軸を指し、高い處の佛體を示すのは、とにかく、目
前に近々と拜まるゝ、觀音勢至の金像を説明すると
言つて、御目、眉の前へ、今にも觸れさうに、ビシ
ヤノゝと竹の尖を振ふのは勿體ない。大慈大悲の佛
たちである。大して御立腹もあるまいけれども、作
がいゝだけに、瞬もしたまひさうで、嘸ぞお鬱陶し
からうと思ふ。

俚は寂然とした夏草塚の傍に、小さく見えて待つ
て居た。まだ葉ばかりの菖蒲杜若が隈々に自然と伸
びて、荒れた此の廣い境内は、宛然沼の乾いたのに
似て居た。

別に門らしいものもない。

此處から中尊寺へ行く道は、參詣の順をよくする

ために、新たに開いた道ださうで、傾いた茅の屋根にも、路傍の地藏尊にも、一々由緒のあるのを、車夫に聞きながら、金鶏山の頂、柳の館あとを左右に見つゝ、俾は三代の豪奢の亡びたる、草の徑を靜に進む。

山吹がいまを壮に咲いて居た。丈高く伸びたのは、車の上から、花にも葉にも手が届く。――何處か邸の垣根越に、それも偶に見るばかりで、我等東京に住むものは、通りがりに此の金衣の娘々を見る事は珍しいと言つても可い。田舎の他土地とても、人家の庭、背戸なら格別、さあ、手折つても抱いてもいゝよ、と恚う野中の、然も路の傍に、自由に咲いたのは殆ど見た事がない。

其處へ、つゝじの赤いのが、ぽーと成つて咲交る。

が、燃立つやうなのは一株も見えぬ。霜に、雪に、長く鎖された上に、風の荒ぶる野に開く所為であらう、花瓣が皆堅い。山吹は黄なる貝を刻んだやうで、つゝじの薄紅は珊瑚に似て居た。

音のない水が、細く、其の葉の下、草の中を流れて居る。それが、潺々として巖に咽んで泣く谿河よりも寂しかった。

實際、此の道では、自分たちのほか、人らしいものゝ影も見なかつたのである。

其のかはり、牛が三頭、犢を一頭連れて、雌雄の、どれもづんと大きく眞黒なのが、前途の細道を巴形に塞いで、悠々と遊んで居た、渦が巻くやうである。此にはたじろいだ。

「牛飼も何も居ない。野放しだが大丈夫かい。

彼奴猛獣だからね。」

「何ともしやあしましねえ。此方人等馴染だで。」

けれども、胸が細く成つた。轆棒で、あの大きい巻斑のある角を分けたのであるから。

「やあ、汝、小僧も達しやがな。あ

い、御免。」

敢て獸の臭さへもしないで、縦の目で優しく視ると、兩方へ黒いハート形の面を分けた。が牝牛の如きは、何だか極りでも悪かつたやうに、さら／＼と

雨のあとの露を散して、山吹の中へ角を隠す。

私は其でも足を縮めた。

「あゝ、漸と衣の關を通つたよ。」

全く、ほつとしたくらゐである。振向いて見る勇氣もなかつた。

氣もなかつた。

小家が一寸兩側に續いて、うどん、お煮染、御酒などの店もあつた。が、何處へも休まないで、車夫は阪の下で俵をおろした。

軒端に草の茂つた、其の裡に、古道具をごつ／＼と積んだ、暗い中に、赤繪の茶碗、皿の交つた形は、大木の空洞に茨の實の溢れたやうな風情のある、小さな店を指して、

「あの裏に、旦那、辨慶手植の松があるで——御覽に成るかな。」

「いや、歸送にしませう。」
其の手植の松より、直接に辨慶にお目に掛つた。

樹立の森々として、聊かもの凄いな坂道——

岩膚を踏むやうで、泥濘はしないがつる／＼と、
にる。雨降りの中では草鞋か靴でゞもないと上下は
難しからう。――其處を通抜けて、北上川、衣河、
名にしおふ、高館の趾を望む、三方見晴しの處
（こゝに四阿が立つて、椅子の類、木の株などが三
つばかり備へてある。）其處へ出ると、眞先に案
内するのが辨慶堂である。

車夫が、笠を脱いで手に提げながら、裏道を崖下
りに駈出して行つた。が、待つと、間もなく肩に置
てぬぐひした圓鬚の女が、堂の中から、扉を開いた。

「運慶の作でござります。」

と、ちよんと坐つて言ふ。誰でも構はん。此の
六尺等身と稱ふる木像はよく出来て居る。山車や、
芝居で見るとは譯が違ふ。

顔の色が蒼白い。大きな折烏帽子が、妙に小さく
見えるほど、頭も顔も大の悪僧の、鼻が扁く、口が、
例の喰しばつた可恐しい、への字形でなく、唇を下
から上へ、への字を反對に掬つて、

「むふッ。」

ニタリと、しかし、恚う、何か苦笑をして居さう
で、目も細く、目皺が優しい。出額で又恚う、しゃ
くふやうに人を視た工合が、此で魂が入ると、麓の
茶店へ下りて行つて、少女の肩を大な手で、

「何うだ。」

と遣りさうな、串戯ものゝ好々爺の風がある。が、
齒が抜けたらしく、豊かな肉の頬のあたりにげつそり
と窠の見えるのが、判官に生命を捧げた、苦勞のほ
どが俣ばれて、何となく涙ぐまるゝ。

で、本文通り、黒革緘の大鎧、樹陰に沈んだ色な
がら鎧の袖は颯爽として、長刀を軽くついて、少し
屈みかゝつた廣い胸に、兵の柄のしなふやうな、智
と勇とが満ちて見える。且つ柄も長くない、頬先に
内側にむけた刃も細い。が、却つて無比の精鋭を思
はせて、颯と掉ると、従つて冷い風が吹きさうであ
る。

別に、佛菩薩の、尊い古像が架に据ゑて數々ある。

みどり兒を、片袖で胸に抱いて、御顔を少し仰向

けに、吉祥果の枝を肩に振掛け、裳をひらりと、片足を軽く擧げて、――いひぐさは拙いが、舞などしたまふ状に、たとへば踊りながらでん／＼太鼓で、兒をおあやしのやうな、鬼子母神の像があつた。御面が天女に齊しい。彩色はない。八寸ばかりのほのぐらい、が活けるが如き木彫である。

「戸を開けて拜んでは悪いんでせうか。」

置手拭のが、

「はあ、其處は開けません事に成つて居ります。

けれども戸棚でございますから。」

「少々ばかり、御免下さい。」

と、網の目の細い戸を、一二寸開けたと思ふと、がつちりと支へたのは、龜井六郎が所持と札を打つた筈であつた。

三十三枚の櫛、唐の鏡、五尺のかつら、紅の袴、重の衣も納めつと聞く。よし、其は此筈

にてはあらずとも。

「あゝ、此は、疵をつけては成りません。」

棚が狭いので支へたのである。

其まゝ、鬼子母神を禮して、ソツと戸を閉てた。

連の家内が、

「粹な御像ですわね。」

と、ともに拝んで言つた。

「失禮な事を、――時に、御案内料は。」

「へい、五錢。」

「では――あとは何うぞお賽錢に。」

其處で、鎧着たたのもしい山法師に別れて出た。

山道、二二町ばかり、中尊寺は最う近い。

大な廣い本堂に、一體見上げるやうな釋尊のほか、

寂寞として何も無い。其が莊嚴であつた。日の光が

幽に漏れた。

裏門の方へ出ようとする傍に、寺の厨があつて、

其處で巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。

巡覽すべきは、はじめ藥師堂、次の寶物庫、さて金

色堂、所謂光堂。續いて經藏、辨財天と言ふ順序で

ある。

皆、參詣の人を待つて、はじめて扉を開く、すぐ又あとを鎖すのである。が、寶物庫には番人が居て、經藏には、年紀の少い出家が、火の氣もなしに一人經机に對つて居た。

はじめ、藥師堂に詣で、それから寶物庫を一巡すると、この番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に、八重櫻が枝も撓に咲きつゝ、且つ芝生に散つて敷いたやうであつた。

櫻は中尊寺の門内にも咲いて居た。麓から上らうとする坂の下の取着の處にも一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した禁札と一所に、たしか「淺葱櫻」と云ふ札が建つて居た。けれども、其のみにには限らない。處々汽車の窓から視た櫻は、奥が暗く成るに従つて、ぱつと冴を見せて咲いたのはなかつた。薄墨、鬱金、また其の淺葱と言つたやうな、どの櫻も、皆ぱつとりとして曇つて、暗い紫を帯びて居た。雲が黒かつたゝめかも知れない。

唯、階の前の花片が、折からの冷い風に、はら／＼と誘はれて、さつと散つて、此の光堂の中を、空ざまに、ひらりと紫に舞ふかと思ふと――羽目に浮彫した、孔雀の尾に玉を刻んで、緑青に錆びたのが尚ほ嚴に美しい、其の翼を――ばら／＼とたゞいて、ちら／＼と床にこぼれかゝると宙で、黄金の巻柱の光をうけて、ぱつと金色に翻るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を睜つた。

床も、承塵も、柱は固より、イめるものゝ踏む處は、黒漆の落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆とは思はれないで、然も些のけば／＼しい感じが起らぬ。さながら、金粉の薄雲の中に立つた趣がある。われら仙骨を持たない身も、此の雲は且つ踏んでも破れぬ。其の雲を透して、四方に、七寶莊嚴の巻柱に對するのである。美しき虹を、其のまゝ柱にして繪かれたる、十二光佛の微妙なる種々相は、一つ一つ錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中にあらはれて、清く明かに、然も幽なる幻である。其の、十二光佛の周圍には、玉、螺鈿を、星の流るゝが如く輝かして、寶相華、勝曼華が透間もなく咲き

めぐつて居る。

此の柱が、須彌壇の四隅にある、まことに天上の柱である。須彌壇は四座あつて、壇上には彌陀、觀音、勢至の三尊、二天、六地藏が安置され、壇の中は、眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納まり、此に、各一口の劍を抱き、鎮守府將軍の印を帶び、錦袍に包まれた、三つの屍が、まだ其のまゝに横はつて居るさうである。

雛芥子の紅は、美人の屍より開いたと聞く。光堂は、こゝに三個の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで、辭して、天界一叢の雲を下りた。

階を下りざまに、見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巣がかゝつて、風に軽く吹かれながら、きら／＼と輝くのを、不思議なる塵よ、と見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。また彌が上に可憐い。

羽目には、天女　　――　　迦陵頻伽が髣髴として舞

ひつゝ、かなでつゝ浮出て居る。影をうけた束、貫の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿である。

漆塗、金の八角の臺座には、本尊、文珠師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた、青い毛の部厚な横顔が視られるが、づづつと足を擧げさうな構へである。右に此の轡を取つて、一寸振向いて、菩薩にものを言ひさうなのが優二玉、左に一匣を捧げたのは善哉童子。この兩側左右の背後に、淨名居士と、佛陀波利が一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかづくやうに杖いて立つ。額も、目も、眉も、其のいづれも莞爾々々として、文珠も微笑んでまします。第一獅子が笑ふ、獅子が。

此の須彌壇を左に、一架を高く設けて、こゝに、紺紙金泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で、本經の圖解を描く。清麗巧緻にして且つ神祕である。

いま此處に来て此の經を視るに、毛越寺の彼は恰

も砂金を捧ぐるが如く、此は月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に、色の青白い、瘦せた墨染の若い出家が一人居たのである。

私の一禮に答へて、

「ご緩り、ご覧なさい。」

二三の散侠はあらうが、言ふまでもなく、堂の内壁にめぐらした八の棚に満ちて、二代基衡の此の一切經、一代清衡の金銀泥一行ませ書の一切經、並に判官鼻肩の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した、黄紙宋板の一切經が、みな黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちて居る。――一切經の全部量は、七駄片馬と稱ふるのである。

「―― 拝見をいたしました。」

「はい。」

と腰衣の素足で立つて、すつと、經堂を出て、朴齒の高足駄で、巻袖で、寒く細りと草を行く。清らかな僧であつた。

「辨天堂を案内しますで。」
と車夫が言った。

向うを、墨染で一人行く若僧の姿が、寂しく、然も何となく貴く、正に、まさしく彼處におはする

天女の御前へ、われらを導く、つゝましく、

謙讓なる、一個のお取次のやうに見えた。

恚くてこそ法師たるものゝ効はあらう。

世に、緋、紫、金欄、緞子を装うて、伽藍に處すること、高家諸侯の如く、或は佛菩薩の玄關番として、衆俗を、受附で威張つて追拂ふやうなのが少くない。

そんなのは、僧侶なんど、われらと、佛神の中を妨ぐる、姑だ、小姑だ、受附だ、三太夫だ、邪魔ものである。

衆生は、きやつばらを追拂つて、佛にも、祖師にも、天女にも、直接にお目にかゝつて話すがいゝ。

時に、經堂を出た今は、眞晝ながら、月光に酔ひ、

桂の香に巻かれた心地がして、亂れたまゝの道芝を
行くのが、青く清明なる圓い床を通るやうであつた。

階の下に立つて、仰ぐと、典雅温優なる辨財天の
金字に縁して、牡丹花の額がかゝる。

かにや、年ふる雨露に、彩色のかすかに成つたのが、
木地の胡粉を、却つてゆかしく顯はして、萌黄に群
青の影を添へ、葉をかさねて、白緑碧藍の花をいだ
く。さながら瑠璃の牡丹である。

ふと、高縁の雨落に、同じ花が二三輪咲いて居る
やうに見えた。
扉がギイ、キリノゝと
僧の姿は、うら
に隠れつゝ、見えずに開く。

ぽかんと立つたのが極が悪い。
あゝ、もう彼處から透見をなすつた。
と然う思ふほど、眞白き面影、天女の姿は、すぐ
其處に見えさせ給ふ。

私は恥ぢて俯向いた。
「其のまゝでお宜しい。」

壇は、下駄のまゝでと彼の僧が言ふのである。

なか／＼。

足袋の、そんなに汚れて居ないのが、まだしもであつた。

蜀紅の錦と言ふ、天蓋も廣くかゝつて、眞黒き御髪しの寶釵はうさの玉一つをも遮さへぎらない、御面影おんおもかげの妙たへなること、御目おんまなざしの美うつくしさ、申まをさんは恐おそれ多い。

たゞ、西にしの方かたはるか遙かに、山城國やましろのくに、淨瑠璃寺じやうるりでら、吉祥天のお寫眞しやしんに似にさせ給たまふ。白理はくり、優婉いうゑん、明麗めいれいなる、お十八九ばかりの、略人ほつひとだけの坐像ざざうである。

ト手てをついて對たいしたが、見上みあぐる瞳ひとみに、御頬おんほのあたり、幽かすかに、いまにも莞爾くわんじと遊あそばしさうで、まざ／＼とは拜をがめない。

私わたしは、端坐たんざして、いにしへの、通夜つやと言いふ事ことの意味みを確たしかに知しつた。

此このまゝに二時居ふたきいきゐたら、微妙びめうな、御聲おこゑが、あの、お口許くちもとの微笑ほゝそみから。――

さて壇だんを退しりぞきざまに、僧そうのとざす一扉とびらにつれて、

かしこくもおんなごりさへ惜まれまゐらすやうで、
涙ぐましく又額を仰いだ。御堂其のまゝ、私は碧瑠
璃の牡丹花の裡に入つて、又牡丹花の裡から出たや
うであつた。

花の影が、大な蝶のやうに草に映した。

月ある、明なる時、花の朧なる夕、天女が、此の
縁側に、一寸端居の腰を掛けて居たまふと、經藏か
ら、侍士、童子、拂子、錫杖を左右に、赤い獅子に
騎して、文珠師利が、悠然と、草をのりながら、

「今晚は――姫君、いかゞ。」
など々と、お話がありさうである。

と、麓の牛が白象にかはつて、普賢菩薩が、あの
山吹のあたりを御散歩。

まつたく、一山の佛たち、大な石地藏も凄いやう
に生きて居らるゝ。

下向の時、あらためて、見霽の四阿に立つた。

伊勢、龜井、片岡、鷲尾、四天王の松は、畑中、
畝の四處に、雲を鎧ひ、二絲の風を浴びつゝ、或も

のは肅々として衣河に枝を聳かし、或ものは戀々と
して、高館に梢を伏せたのが、彫像の如くに視めら
るゝ。

其の高館の趾をば靜にめぐつて、北上川の水は、
はる／＼、瀬もなく、音もなく、雲の涯さへ見えず、
たゞ（はる／＼）と言ふやうに流るゝのである。

「此の奥に義經公。」

車夫の言葉に、私は一度俾を下りた。

歸途は――今度は高館を左に仰いで、津輕青
森まで、速く續くと云ふ、まばらに寂しい松並木の、
舊街道を通つたのである。

松並木の心細さ。

途中で、都らしい女に逢つたら、私は最う一度車
を飛下りて、手も背もかしたであらう。――判
官にあこがるゝ、靜の靈を、幻に感じた。

「あれは、鮭かい。」

すれ違つて一人、澆刺たる大魚を提げて駈通つた

ものがある。

「鱒だ、――北上川で取れるがすよ。」

あゝ、あの川を、はる／＼と――私は、はじめて一條長く細く水の糸を曳いて、魚の背とゝもに動く状を目に宿したのである。

「あれは、はあ、驛長様の許へ行くだかな。昨日も一尾上りました。其鱒は停車場前の小河屋で買ったがすよ。」

「料理屋かね。」

「旅籠屋だ。新築でがしてな、まんづ此邊では彼店だね。まだ、旦那、昨日は其の上に、はい鯉を一尾買入れたでなあ。」

「其處へ、つけておくれ、晝食に――」

――此の旅籠屋は深切であつた。

「鱒がありますね。」

と心得たもので、

「照焼にして下さい。それから酒は饅詰のがあつたらもらひたい、成りたけいゝのを。」

束髪に結つた、丸ぼちやなのが、「はい／＼。」

と柔順だつけ。

小用をたして歸ると、もの陰から、目を圓くして、
— 大事さうに、

「あの、旦那様。」

「何だい。」

「照焼にせいと云ふ、お誂ですがなあ。」

「あゝ。」

「川鱒は、鹽をつけて焼いた方がおいしいで、然
うしては不可ないですかな。」

「あゝ、結構だよ。」

やがて、膳に、其の鹽焼と、別に誂へた玉子焼、
青菜のひたし。椀がついて、蓋を取ると鯉汁である。
あゝ、昨日のだ。此はしかし、活きたのを料られる
と困ると思つて、わざと注文はしなかつたものであ
る。

口を溢れさうに、なみ／＼と二合のお銚子。

いゝ心持の處へ、又お銚子が出た。

喜多八の懷中、此にきたなくもうしろを見せて、
「こいつは餘計だつけ。」

「でも、あの、四合罐一本、よそから取って上げましたので、なあ。」

私は膝を拍つて、感謝した。

「よし、よし、有難う。」

香のものがついて、御飯をわざ／＼炊いてくれた。

此で、勘定が――道中記には肝心な處だ――

二圓八十錢 二人分です。

「帳場の、おかみさんに禮を言つて下さい。」

やがて停車場へ出ながら視ると、旅店の裏がすぐ水田で、隣の地境、行抜けの處に、花壇があつて、牡丹が咲いた。竹の垣も結はないが、遊んで居た小兒なちも、いたづらはしないと見える。

ほかに、商屋に、茶店に、一軒づつ、庭あり、背戸あれば牡丹がある。往來の途中も、皆然うであつた。且つ溝川にも、井戸端にも、傾いた軒、崩れた壁の小家にさへ、大抵皆、菖蒲、杜若を植ゑて居た。

辨財天の御心が、自ら土地にあらはれるのであら

う。

忽ち、風暗く、柳が靡いた。

停車場へ入った時は、皆待合室に居すくまつたほどである。風は雪を散らしさうに寒くなつた。一年のいにしへの古戦場の威力である。天には雲と雲と戦つた。

【完】